

聖トマスにおける言葉、思惟、対象の關係 とアリストテレス自然学の方法

丹 下 信 雄

1 聖トマスの神学大全の中で *natura* という文字の用法を調べて行くと、極めて多義である。アリストテレスの著作の中で *φύσις* の用法を調べても又捉え難い。所謂《自然学講義》そのものの中でも、第1巻は方法論的に重要な巻であるのに、当の主題とも考えられる *φύσις* の定義はない。

所謂ソクラテス以前の哲学者と言われる人々の主題がそれであると言われても、周知の様に多義である。

たしかに、この言葉は哲学史を通じてもっとも曖昧なものの一つであろう。然し、何故そうなのであろうか。現に我々は自然科学という言葉をもっている。その時には、この自然なる文字は明瞭な用法なのであろうか。決してそうではない。何故ならば、自然科学と言う科学は存在しないから、当然、その様な用法として十分に自然が限定されたことはない筈である。我々は精密科学の代表として物理学 *Physics* をもっているが、そこではもはや方法的限定が厳しく、古い時代の曖昧さが無い代りに、昔の *φύσις* や *natura* の包括的な意味はない。それでは、見るものも見られるものも、創るものも創らざるものも、創られたるものも創られざるものも、否、あるものもあらざるものも、すべて *natura* ではないかと考えていった古い時代の人々の曖昧な思考の見当が全くはずれていると考えることが出来るのであろうか。

ここでは自然と言う言葉の探求が主題ではない。即ち、古代、中世の人々が研究の出発点として何を考えたかを追求し、言葉と思惟と対象の關係

を歴史的にいくらか明らかにすることである。けれども研究の背景としては、この自然なる言葉によって示されたどこまでも曖昧なるものが、常に、何等かの意味では、あるものとして追求されている。

2 さて、言葉と思惟と対象の三者の関係について聖トマスがふれているところは極めて多いが、ヨハネ福音書註解の冒頭にあるものが簡潔要を得ていると思われるので、それによると次の様に述べられている。

アリストテレス命題論によれば、声の中にあるものは精神の中にあるもの、即ち、諸の経験されたものの諸の記号 *signa passionum*, *παθήματων σύμβολα* である。

然るに、聖書の中に *Petra autem est Christus* (I Cor. X. 4) とある様に、我々の精神の内なるものが外的な言葉 (*verbum exterius*) によって指示されている。そして、この我々の精神の内にあるものが、外的な言葉よりも、その原因として先にあることは明らかである。それ故に、精神の内なる内的言葉 (*interius verbum mentis*) が何であるかを知るためには、我々は外的言葉によって運ばれているものが何であるかを知らねばならない。

然るに、人間知性の内には三つのものがある。即ち、

1. 知性の能力 (*potentia*) 自身
2. 知解されたものの形相 (*species*)
3. 知性作用 (*operatio*) 自身

然し、この三者いずれも、外的言葉によって指示されているものとは考えられない。何故ならば、そこで“磐 *petra*”という名でキリストを指示しようとしているものが意図しているものは、知性自身の実体としての能力でもその作用でも、又知性がそれによって知解する形相 (*species qua intellectus intelligit*) でもない。何故ならば、形相は外的な物体の中にある形相^{フォルム}の内的になったものであり、それによって対象^{スペチエス} (*quod intelligi-*

tur) が認識される手段であるが、ここで磐と言う名によって指示しようとしているものは、キリストであって外的対象としての磐ではない。

従って、知解するものが知解によって形成するもの (illud quod format) が、内的言葉といわれるのである。即ち、キリストとしての磐は知解するものが知解することによって形成した内的言葉の外的言葉による表示なのである。

然るに、知性が形成するものは次の二つの作用によって形成される。

1. 不可分なるものの直観と言われる働らきによって限定を形成する (secundum operationem suam quae dicitur indivisibilium intelligentia, format definitionem)。
2. 結合分離する働らきによって、命題又はその様なものを形成する (secundum operationem suam qua componit et dividit, format enuntiationem, vel aliquid hujusmodi)。

この二つの作用が本質的に何であるか、両者の関係がどの様にあるかは、⁽²⁾ 聖トマスの命題論註に詳しいので、それについてはここでは深く入らないが、この小論の結論でふれたい。

いづれにしても、内的言葉とは、この二つの作用によって形成されたものである。それは知性自身でも、外界から来た形相^{スペチエス}でもなくて、その中であって、知性が対象を知解する in quo なのである。対象は in quo としての内的言葉に於て知解されるものである (id quod intelligitur)。この三者 quo, in quo, id quod の相互の限定媒介の轉換的關係の中に客観的認識が成立するのである。即ち、この内的言葉の中に、知性は、知解された事物の本性 (natura rei intellectae) 即ち、その事物の事理 (ratio) 即ち類似像 (similitudo rei intellectae) を見るのである。

以上は知解するものと知解されたものが別の場合であるが、両者が同一のものである時も又内的言葉が形成され、その時は知性は自己自身の事理と類似像を見るのである。知性が如何にして自己を見るか。いかにして

内的言葉が形成されるか、ここでは説明されていない。ただ、知性の中に止まり乍ら尚生まれ出るものとしての、御子たる御言葉の類似像がここにあると言われている。

次に聖トマスは神的知性と人間及び天使の知性のもつ言葉の差違を述べている。即ち、人間の言葉は形成されたものとなる前には、形成されうるもの (*prius est formabile quam formatum*) として可能的にのみあるのである。即ち、例えば、^{ラピス}石の^{ラチオ}事理を理解するためには人間知性は推論によってその事理に到達しなければならない。即ち事理の彷徨 (*discursus rationis*) によってあちらこちらに投げ出され、しかる後にはじめてその事物の^{ラチオ}事理に到達するのである。聖トマスが思惟 (*cogitatio*) と言っているものは、この人間の探求の彷徨自身 (*ipse discursus inquisitionis*) のことである。従って、人間の言葉ははじめは常に現実的ではなくて可能的なのである。それに対して、神の言葉は常に現実的であり、従ってそれは思惟 (*cogitatio*) と言われるのにふさわしくないのである。

次に、神的知性の言葉は完全であるが、人間的知性の言葉は不完全であると言われる。何故ならば、人間はその諸の概念とか判断の作用を一つの統一的な言葉で表現出来ないで、分割的に、多くの不完全な言葉で表現しなければならぬからである。

第三に両者の差違は、人間の言葉は人間の本性それ自身と同一のものでなくて、人間の精神の中で単に知的存在 *esse intelligibile* をもつに過ぎず、且つ、精神自身は単なる働らき (*operatio*) ではないから、言葉も精神の本質としてそこにあるのではなく、どこまでも附帯的なものとして、そこにあると考えられる。然し、神においては知解することとその存在は一つであるから、その言葉はその本性に属しているのである。

3 人間に於て、言語と思惟の関係を考えるとき、言語と思惟を全く同一視するのも、又全く別のものとするのも、ここでの主張ではない様であ

る。思惟とは内的言葉の活動であり、外的な言葉は記号 **signa** としてこれを指示する。従って、全く別のものとして思考されたものが、やがて言葉となるのではない。即ち、すでに外界から受用される形相^{スベチエス}も、ある形象として原初的な言葉であろうが、これを基礎にして内的な言葉の活動であるところの直観的限定作用と彷徨する命題形成作用があり、その結果そこに言葉の世界が形成され、その中に知解されたものの事理^{ラチオ}又は類似像が見られるのである。

もし、以上の様に人間の思惟としての内的な言葉の活動^{ラチオ}が事理探求の彷徨によって行なわれるとするならば、それは現実にはどの様にして行なわれるのであろうか。

それは、到底、固定的な抽象的な普遍概念とか原理から出発し得る様なものではない。

一体原理はどの様な手続で発見せられるべきものであろうか。

私は、これに対する一つの答を、聖トマスが多くの努力を傾けて註解したと思われる自然学講義の中に見ることが出来ると思う。

4. アリストテレスの所謂自然学講義には色々の解釈がある。然し、それらを通じて従来一貫して来た考え方がある。即ち、所謂形而上学が前提となって、その原理の下位の特殊学への応用であると言う考え方である。

然し、形而上学それ自身その実体が何であるかには周知の様に論議が多い。その中で第一哲学とか神学と言われているものが、一体どの部分であるのか必ずしも定め難い。又その中で自然学として数学と神学に対比されているものが、この所謂〈自然学講義 $\Phi\Upsilon\Sigma\text{IKH AKPOA}\Sigma\text{I}\Sigma\text{S}$ 〉⁽³⁾であると言う十分な証拠はない。又その組織それ自身も問題多く統一的著作でないことは確実である。

この著作は一体何であるのか。少なくとも、上述の様な諸の前提によって読むことが必然でないことはたしかである。従って、我々はこれをいか

なるアリストテレスの著作をも前提にしないで読むことが出来る。又後代の様々な読み方を前提にしないで読むことが出来、又それが第一になされるべき事と思われる。聖トマス自身は、所謂形而上学を第一哲学とし、その中で言及されている特殊部門としての自然学をこの所謂自然学講義と考えてはいるが、我々は、その様なものと必ずしも考えないことによって、却ってこの所謂自然学講義の本質を明かにし得ると共に、聖トマス自身の本質をも明かにし得ると考えるのである。いかなる古典においても、第一に問題になるのは、そこで何が考えられているかであり、更にその方向には何が当然考えられるべきであったかである。

5 アリストテレスにおいて、学(*ἐπιστήμη*, *scientia*)とは原理(*ἀρχή*, *principium*)からの認識であると考えられているが、然し、一体如何にして原理を探求するのか、その方法について語られているところは極めてすくない。形而上学 A はそれまでの哲学史であり、詳細な既往の業績の報告とその批判であるが、自己の立場の積極的説明が行なわれているとは思われぬ。又既往の哲学が発見したいいくつかの原理を一つの体系に総合するとしても、そこにはある立場とか方法がなくては不可能である。

その方法を如何なるものとアリストテレスは考えていたのであろうか。

自然学 A 冒頭の学の方法についての短い叙述はその稀な例の一つである。そこでは次の様に述べられている⁽⁴⁾。

全て何かについての科学的知識は、そのものの、諸の原理を含むべきものであろうから、この様な原理の発見が自然学の最初の仕事である。そして、それに達する道は、“吾々に、よりよく知られているものから”(ἐκ τῶν γνωριμωτέρων ἡμῶν) “本性上、よりよく知られているものへ”(ἐπὶ τὰ σαφέστερα τῆ φύσει) の道、即ち、混乱せる資料(συγκεχυμένα)の分析によって普遍的なものから(ἐκ τῶν καθόλου) 特殊なものへ(ἐπὶ τὰ καθ' ἕκαστα) の道である。何故ならば、全体的なものは感覚によりよく知られ、

普遍的なものが全体的なものであるからである。そして名は限定を指示し、それは漠然と全体を指示しているから、やがて一つの限定は特殊的なものへと分割されて行く。この様にして、子供は全ての男達を父と呼び、全ての女達を母と呼ぶのである。

アリストテレスは別の⁽³⁾ところでは、人間の認識は全て感覚から来るのであり、感覚は個物を捉えるものと考えているが、ここでは感覚は全体的普遍的なものを捉えると言い、同時に知性の活動と考えられる限定作用が働らき、漠然と全体を捉えると言っている。この二つの主張は矛盾しているのであろうか。然し、これは矛盾しているのではない。彼が感覚によって個物が捉えられると言っているのは、認識の存在論的順序であり、普遍とか全体から認識がはじまると言っているのは当然認識の手続の順である。そうして、その時働らく作用は単に感覚でもなければ、知性でもない筈である。正に、それは *συγκεχυμένα* を捉える作用でなければならない。聖トマスが註解の中で、アヴェロエスがこれを論理的な単純なものの複合体即ち種の論理的複合体と考えるのに反対している理由がここにあるのであろう。それはやがて分節して論理的複合を可能にするとしても、ここで捉えられるものは漠然とした *indistincta* なる全体であり、それを捉えるものは限定命名の作用である。⁽⁶⁾子供が、全ての男達を漠然と父と呼ぶとき、捉えたものでありその作用である。

又我々は、*συγκεχυμένα* は同時に“よりよく知られているもの”と言われていたところから、直ちにヘーゲルの“直接に我々に解っているもの (*bekannt*)”を連想し、前哲学的熟知と哲学的認識の円環的發展をアリストテレスも主張したとみなす人があるかも知れないが、それはどうであろうか。中世では、アウグスティヌスが告白11巻の時間論で、時間について“たしかに私は知っている” (*fidenter scio*) と言うと共に、更に“私は知らない” (*nescio*) と言い、既知が未知に投出され、やがて実存的時間として明かにされるのを見るが、それでも尚それをヘーゲルの、円環的と見るこ

とは出来ない。そこには尚深い無知の告白と認識の発展が述べられている。アリストテレスにおいても、既知と認識の円環が語られていると言う証拠はない。

では、ここで混乱せる資料と言われている科学的認識の出発点とは何であろうか。

それは、その時点における科学的認識の全体とも言える。何故ならば、我々は常に科学的認識の途中にある。我々が立つ時点は歴史の途上であって、そこには思想の混乱した集積がある。その意味では、その時点における科学的認識の全体こそ、この漠然とした混乱せる資料と言うことも出来る。

しかし、そうではない。何故ならば、たとえ混乱はしていても、科学的認識においては一つの名、一つの定義が漠然としたものを指示しているのではない。むしろ、特殊な限定によって少数の抽象的原理を発見し、その演繹の体系として形成されているものが科学である。ギリシャにおいても、アリストテレスが問題にしている所謂自然学者達は殆んどその様な考え方をしていたとアリストテレスには考えられている。

従って、その時点における科学的認識の全体は、アリストテレスの言う混乱せる資料ではあり得ないのである。

従って、若し、その様なものを求めるとすれば、むしろ、自己の生きている日常的な生の中に、その様な混乱せる資料があり、名と、それによって指示されている定義がひそんでいて考えるより外はない。そうして、それはやがて、特殊化され、多くの命題に分化されるべきものである。判断、即ち、結合分離はより深き真と言われるのである。

6 以上の様に考えるとき、自然学の叙述の順序を理解出来る様に思われるのである。即ち、彼は冒頭であの様な方法論を述べた後、既往の業績を批判して、それらが全て、混乱せる資料からのよき出発をせず、却って抽

象からのあやまった出発をなしているものとして否定するのである。

我々が直接的な所与としてもっているものは、変化する事象である。変化は一つの漠然とした資料であるとも言える。そうして、それについては、我々は既に様々な言語表現をもち、又思想の体系をもっている。ただ、どの様な表現も、思想も、この直接所与であり、臆見である変化そのものの存在を否定する如き論理は適切なものとは考えられない。

アリストテレスは、既往の思想がすべて、抽象的論理的な立場から“無からは何も生じない”(ex nihilo nihil fiat)ものと考え、一切はすでにあるものから生じなければならぬと考えて、必然的に、すべての変化を抽象的存在である要素的構成的なものから説明せんとして失敗したものと批判するのである。

アリストテレスは、かくて、変化の直接性を我々の日常の言表の中に捉えようとする。

即ち、第1巻第6章までに、既往の学説を批判して後、変化するものを表出する三つの言い方をあげ、その中に、変化の要素として、質料と形相と欠除の原理を発見するのである。その上で、第2巻、第3巻を経て、場所論、時間論に達するのであるが、そこに一貫して流れる方法論は、常に日常的言語表現を直接経験の手掛りとして、同時に哲学史的批判の上に立って、言わば、混乱せる資料を直接に捉えて、その分析を行なうと言うやり方である。

その場所論が、たとえ、近代の実験的物理学の見地から重大な誤謬を含むとしても、それは当時の観察の不備と、言語分析における範疇的考察の不完全さから来たのであって、その方法論の根源的性格と総合性を疑うことは出来ない。それが彼をして、よく空間を具体性において、即ち物体とは別であり乍らも離れることの出来ないものとして捉えしめたのである(212 a20)。

又時間論においても、従来の分析的抽象的思考による単なる自然的、空

間的、数学的抽象的時間の立場から去って、どこまでも主体の体験の時間に接触する地点に達し、時間のもつアポリアに出会わしめたのである。時間論冒頭の時間の叙述はアウグスティヌスの *fidenter scio* と言っているものと極めて似ているのは偶然ではない。

これらの諸の論述の最初にあるものこそ *συγκεχυμένα* である。我々が研究の出発点において、直接に知られたる漠然たる普遍から出発するということは、抽象的普遍から出発するということと全然別の手続である。

そして、その様な方法による原理探求の道は、正に、聖トマスの言う、事理探求の彷徨の道であったということは出来ないであろうか。

聖トマスが、内的な言葉は、直観的な限定作用と命題形成作用によって形成されたものと言うと共に、その様な人間知性の思考を探求の彷徨と言うとき、その道は、アリストテレスの自然学冒頭の、名によって漠然たる全体を限定し、やがてその中に特殊な命題を形成して行く道と考えられぬことはない。

聖トマスが命題論註⁽⁷⁾で、不可分なるものを把握する知性の概念作用が、判断作用の前提としては自体的には複合 (*compositio*) であり、真偽を含むと言っているのは、この思考探求の手続の第一歩を指示していると思われるのである。

註

- (1) S. Thomae Aquinatis Super Evangelium S. Ioannis, Lect. I, 1952, Marietti.
- (2) S. Thomae Aquinatis In Arist. Libros Peri Hermeneias Expositio, 1955, Marietti.
- (3) Wieland, W.: Die Aristotelische Physik, 1962, Göttingen, S. 13-15.
- (4) Aristotle's Physics, by W. D. Ross, analysis, p. 15
- (5) Met. 1018 b.
- (6) S. Thomae Aquinatis In Octo libros Physicorum Arist. Expositio, 1954, Marietti, lect. I, N. 8
- (7) Lect. III 1-4